

二

古代の北方民族の文化を探究するのは、所詮支那の記録を主要なる據とするの外に途はないが、今まで自分の探した所では、彼等の間に於る巫に關する記事の見えて居るのは案外少く、また見え初めた時代も比較的後世のやうである。併しながらこれは支那人が北狄と卑しむだ民族のことを、極めて粗略に書き付けて置いた記録を基にしてのことであるから、其の中に巫の記事が見えないからといふて、直ちにその見えない時代には彼等の巫は無かつたものであるといふやうな見解は勿論避けねばならぬ、かゝる信仰は決して文化の程度が高まるに連れて生じて來るものではない筈であるから、ある民族の間にある時代にこれが有つたといふ證據があれば、その以後の時代には兎も角、其の以前には必らずまた存在したものであると考がへても、殆ど誤りではあるまいと思ふ。

さて北方民族中最も古くまた最も有名な種族として、支那の記録に現はれて居る匈奴ノ以前は匈奴はトルコ種であるといふ説が優勢であつたが、近頃白鳥博士はこれが蒙古種であることを論述して居られる^②、今は便宜その説に従がつて蒙古種と見ることにするノについて、巫の記事を求めて見ると、前後兩漢時代の記録に於てはまだ之を認め得ないが、晋の時代にはその存在を認むるに足るべき記事がある、即ち晋書の劉元海の傳によると、匈奴の左部の帥なる劉豹の妻呼延氏が

魏嘉平中（二四九一—二五〇一） 祈ニ子於龍門、俄而有ニ一大魚頂有ニ一角、軒レ髻躍レ鱗而至ニ祭所、久レ之乃去、巫覡皆異レ之

曰、此嘉祥也